目次

～書き手ごとに配列～

◇麻績の作品

オレンジのアトリエ　1
カース　2
ジ　エンド　4
パイロキネンシス　7
鮮烈なモノクローム　8

◇澪音の作品

あとがき

●●の村 …… 14
あとがき
◇蒼の作品
スミレ …… 30
花うらない …… 32
あとがき
◇Right の作品
時を結ぶサクラ …… 35
ディエーラプロミシオン …… 41
あとがき

麻績の作品

オレンジのアトリエ

麻績

今年も向日葵が咲いた。無駄に広いこの土地を向日葵畑にしようと提案されたのは、いったい何時のことだったろうか。一面の向日葵は風情があって、何処を切り取っても絵になるが、ただでさえ小さなアトリエは背高く太陽に向かって咲き誇るそれらに押しつぶされそうで、その上この鮮やかなオレンジ。ドアを開けた途端に息が詰まりそうだ、と彼はぼやいた。

傾いていく太陽が、薄暗い部屋に向日葵とは違うオレンジを射した。絵と肌から遮るようにカーテンを閉め、彼は再びキャンバスに向き直る。その向こうでは彼女が行儀よく車椅子に座って、感情の読み取れない瞳でこちらを見つめている。彼は筆を持ち上げて、まだ白いところの多いキャンバスに色をのせはじめた。筆がキャンバスを走り、その度に少しずつ、白を塗りつぶして彼女が写し出されていく。

「夜になったら、向日葵を見に行こうか」

筆でパレットから色をとりながら、彼はキャンバスの向こうに声を投げかけた。返事はない。顔を上げると、彼女は相変わらずの様子で座っている。彼は目を細めた。

「……もう少しで終わるよ」

彼女の返事はない。紅色をとった筆先が、キャンバスの上の彼女に微笑(ほほえ)みを浮かべさせた。

カース

麻績

――桃色の塊が床を這(は)いずっている。

そうか、と呟(つぶや)いていた。そうか、おれは、やつを。

やつが憎かったわけでもなし、好きだったわけでもない。いいや、違う、かつてはきっと一途(いちず)だったのだ。いつのまにか、こうなっていた。やつは何事か唸(うな)って、ズルズルと薄汚れた絨毯(じゅうたん)の上を這(は)っている。外へ出ようとしているのか？　無駄だろう。いくら足掻(あが)けど、その身体ではたどり着けまい。ドアノブはおまえの前方約二メートルのところだ。

咥(くわ)えた煙草(たばこ)から立ち上る紫煙が、天井へ登っていく。そして逃げ場のない混凝土製の空に溜(たま)っていった。今は何時だろうか……おれは時計を見るが、先刻手が当たって落っこちたときに壊れてしまったらしい。秒針も時針も分針も、あるべき場所から外れてガラス蓋の下のほうに重なり合っていた。窓はカーテンがピッチリ閉まっていて、太陽の傾きから時刻を伺い知ることは出来ない。カーテンを開けようと手を伸ばすが、近くにあるはずなのに手が届かなくて、それでもうんと伸ばしたらバランスを崩して転んでしまった。大きな物音がして、やつがゆっくりとおれのほうを向いた――片方しかない濁りきった瞳がおれを見つめる。見るなよ、と掠(かす)れた声で言ったのはおれだ。見るなよ。そう言っても、やつはじっとおれを見る。その耳は、ただの飾りなのか。では何を言

っても、到底聞き取れやしないのだ。
兎に角、時間を知る術はもうない。ならばもう夜ということにしてしまおう。やつがああなってから、この部屋の時間が止まってしまったことにすれば良い。やつとおれが動いている間は、少なくともこの部屋に朝は来ない。ああおれは。まだやつを諦められないのか。当たり前と言えば、そうなるのか。あれだけのことだった。いつしか、それだけのことになった。いつからだか覚えちゃいない。
おれはずるずるとその場に座り込んだ。やつが動かなくなったとき、おれはどうやって終わろうか。肺いっぱいに、煙草の煙を吸いこんだ。このまま黒く染まって、夜に潰れて消えてしまえば最善かもしれない。乾いた笑いが紫煙とともに溢れた。おれは何を言っているんだろう。どうやら、思考が鈍っているらしい。もっと現実的で即効性のある……そう、例えば、そこの窓から下へ身を躍らせる、とか。そういうことを考えなくてはならない。だが、窓からいくのは却下だ。そうするには少々この部屋は、高さが足りない。この部屋にある中で、使えそうな道具を思い浮かべてみる。包丁、ナイフ、カッター、ハサミ、タコ紐、睡眠導入剤。いま思いついたのはそのくらいだが、どれも使い古されたありきたりなものに見える。それはおもしろくない。もっとドラマティックを追求したかった。あの日みたいに。……違う、ドラマティックを追求していては駄目だ。おれはもっと現実的なことを考えなくては。あんなに言われただろう。理想だけを見るなと。
おれは、やつを見た。やつはとっくにおれから興味を失くしたようで、おれに向けていた視線を虚空に向けて静止している。動かなくなったのか？　せめて、おれが思考をまとめ終えるまでは動いていてほしかったが、仕方ないだろう。おれは偶然にも手元にあったダンボール用のカッターを取る。もう一度やつを見た。もう一度、動き出しはしないか。いや。もう諦めよう。動いたとしても、またすぐにこうなるに決まっている。おれは首を振って、カッターを首にあてがった。
——ああ、これで幕引きだ。

ジ　エンド

麻績

プロローグ

――ハワードは不幸な子だった。いや、彼の人生は、途中までは順調に進んでいた。厳しいが愛を与えてくれる両親、慕ってくれる妹、数こそ多くはないが、気の合う友人たち。彼は幸せだった。

だが――人生というものは何時何が起こるかわからないもので――ハワードは突然、他人の手によって、その人生に幕を下ろされることになる。有り体に言えば、殺されたのだ。そのとき彼は夜道を歩いていた。彼は友人の家でバースデーパーティーをした帰りで、ついさっき交差点で友人と別れたところだった。その日のパーティーは楽しくて、彼はその名残から抜け出せずにいたから、後ろからやってくる気配に気付けなかった……こんなことを言うのは加害者を擁護するようだが、彼がこんな結末に終わったのは、彼の不注意によるところも少なからずあったのだ。彼は知る由もないが、犯人はその頃紙面を騒がせていた通り魔で、不運な彼はその十一人目のターゲットに選ばれてしまったのだった。かわいそうなハワードは、後ろからナイフで喉を裂かれ、腹に……これ以上はやめておこう。ああ思い出しても痛ましい。そのあと夜が明けたころに、愛犬と散歩を楽しんでいた近所の爺(じい)さんに発見され、彼の悲惨な最期は明るみに出た。医者が口にした死因は、出血多量だった。喉と腹の傷から溢(あふ)れた彼の血液が、歩道のアスファルトを染めていたのだから、妥当な判断だろう。

かわいそうなハワード。彼にとって、この結末はバッドエンドだった。悪い結末だ。それも、ひどく悪い、最悪に近い結末。彼はこの結末を変えたいと思った。彼でなくとも、そう思うだろう。なんたって、突然だ。突然、

自分が望んだわけでもなく、受け入れる暇もなく、どうして自分がこんな目に遭うのだと疑問で潰れそうになりながら命を落とした。そうなったのが自分だと仮定するといい。ほとんどが嫌だと言うだろう。彼もまた、そう言った。そして目の前に差し出された手を取ったのだ。それは彼にとって救いとなり得るものだった。

ハワードはその手の言う通り、扉をくぐることにした。手は自らの名をバッドエンドと言って、彼にハッピーエンドを探すように指示したのだ。そして、彼がいま目の前にしている、木製の古いドアの前へ連れて来た。ここへ着くまでにも、さまざまな苦労があった。そう、本当にさまざまなことがあって、ここで言えば 10 ページは使ってしまうから、あえて何も語らずにいよう。実際は、特に大したイベントはなかったのだが。それに対して少し脚色を入れてしまったのは、語り手の性として流してもらえると嬉しい。

「ハッピーエンドは、本当にこの中にいるのかい？」

「さアな」

彼が聞くと、バッドエンドはその長い爪の先で彼の頬をつついた。バッドエンドは、黒くて、ゼラチンを入れすぎたような弾力のあるかためのゼリー状で、拳二つ分ほどの大きさをしていて、大きな金の目と鋭そうな牙の生えた口を持っていた。それが、ハワードの肩の上に乗っていた。ゼリー状の身体から伸びて彼の頬をつついていた細い骨のような指で、ドアノブを叩いた。コツコツ、と爪先が金属に当たる硬質な音が響く。

「そンなことはいいカラ、早ク入ろうゼ」

「納得いかないよ。いないかもしれないのに」

「オマエめんどッくせえヤツだナ」

尻込みするハワードに、バッドエンドはイラついているようだった。コツコツとドアノブを叩く速度が上がる。ハッピーエンドのためならバッドエンドの指示に従うと頷いたのは、ハワード本人なのだ。バッドエンドがイライラするのも無理はない。

「オマエ、本デモ何デモ、最初から結末が分かっテちゃ面白くナイだろう。それとも、他人カラ結末を聞いた後デ読むタイプか」

結末のわかった物語！　それ以上に面白くないものはない。きっとハワードもそう思うだろう。この世で一番つまらないものだ……いや、それは言い過ぎだ。撤回しよう。ともかく、面白いものでないことに変わりはない。ハワードが本当にそう思っているのかは置いておいて。彼は半ば無理やりに納得した。そうだ、この部屋にハッピーエンドがいる可能性と、いない可能性の両方を考えるといい。シュレディンガーのハッピーエンド、ということにでもしておこう。彼はそう考えた。彼はこの間に、かの有名な思考実験と似た思考を展開したのだ。

「じゃあ、開けるよ」

彼が真鍮（しんちゅう）製のドアノブを握ると、バッドエンドが満足げに口角を上げた。彼はドアノブを何度か握り直すと、意を決して木製のドアを開ける。

パイロキネンシス

麻績

そして、彼女がそのアンバーの瞳を見開いた！　途端、彼女を中心に巻き上がる熱を孕んだ風が、頬を撫で後ろへ飛び去っていく。彼女は呼吸の度、冬のしんと冷めた空気を吸い、薄い唇の隙間から熱を吐き出した。彼女を止められる者は、もはや存在しなかった。ぶわりと再度巻き起こる熱風。僕の前にいた人たちはどうなった？　目の前から熱風に乗り流れてくるのは白っぽい粉だ。これは、これは灰か、灰、灰だ！　高音で熱された人間はあっけなく灰になり、惚けた僕の開いた口に飛び込んでく。

鮮烈なモノクローム

麻績

序

暗い顔をした亡霊が、ひび割れたコンクリートの上でギターを鳴らしている。摩天楼の根元に反響した音色は、辺りの空気を震わせながら霧散した。聞いたことのない旋律だ。だが、不思議とどこかで聞いたような感じを私に与えた。どこかで、きっとどこかで聞いたはずなのに、それが何なのか、どこで聞いたのか、誰かと聞いたのかひとりだったのか、そこだけ霞がかっていて、何も思い出せない。

ギターの旋律に歌が加わった。連絡路の柵から身を乗り出して見ると、ギターを爪弾く亡霊の傍で、少年がひとり、歌っている。言葉は正確に聞き取れないが、美しい声だった。ボーイソプラノというのだろうか、声変わりを済ませていない少年だとしても、高い声をしている。不意に、彼が顔を上げた。真上、ちょうど私と視線が交錯する。私は思わず息を飲んだ。美しいのは声だけではない——遠目でも分かるほど、綺麗な風貌。上の世界でも滅多に見ない美しさだ。しかし、黒い髪に白い肌、瞳はよく見えないが、きっと黒か白なのだろう……まるで色彩を失った出で立ちは、彼が亡霊であることを示していた。

亡霊のギターが次第に盛り上がっていって、少年の声量も大きくなっていく。少年は私から視線を外した。曲は山場を迎え、突然、波が引くようにおとなしくなる。そのまま静かに曲は進み、やがてフェードアウトした。終わり、らしい。微かに響いていた余韻も、いつの間にか消えていった。

下にコインを投げようとして、やめた。足音が近づいてきて、私のすぐ後ろをワインレッドのシャツを着た男

が通っていったのだ。私はポケットに手を入れたまま下界を見下ろして、その場を去った。亡霊のギターと少年の歌声が、耳の中で谺(こだま)している。

私はフラフラと連絡路を歩いて、A区の中に入った。商業区であるA区は、夕方近いにも関わらず、その賑(にぎ)わいが落ち着くことはない。あちこちで飛び交う客引きをする声や客と店員の会話が、広い二十一階を満たしていた。私はその間を縫って、D区に繋(つな)がる連絡路を目指す。

「そこのお姉さん、ちょっと見ていってよ。ネックレス、ブレスレット、アンクレット……新品から中古まで揃(そろ)えてるよ」

途中で声を掛けてきたアクセサリー店の客引きに足を止める。彼の後ろで居を構える店は、それなりに繁盛しているらしい。女性客を中心に、ガラス扉の向こうでは色んな人々がキラキラしたアクセサリーを眺めていた。

「どうです？　見て行かれるだけでも結構。きっとお気に召すものが見つかりますよ」

客引きは私を店に入れようと話しかけてくるが、

「ごめんなさい」

と、ひとこと断る。客引きは短く了承して、すぐ他の女性に声を掛け始めた。店に寄らない私の価値が、彼の中で急落したのが目に見えて分かった。私はその場から足早に立ち去る。

A区を抜け、A区とD区の間にかかる連絡路へ出る。さっきまでは青いばかりだった空は、今ではすっかり、鮮やかなオレンジに取って代わっている。西日を浴びて連絡路にいる人々の頬(ほお)がオレンジに染まったが、D区を構成する赤い建造物たちは、いまいち染まれずにいるようだった。同じくD区へ渡る人々に紛れ、私もD区の赤レンガ造りの門をくぐった。

D区の入口から伸びる大きな通りを進むと、中心部に位置する広場に辿(たど)り着(つ)く。私が広場に着いたとき、ちょうど六時を告げる鐘が時計塔から響き渡った。もうそんな時間なのか、と時計塔を見上げる。人工レンガの巨大

な塔が、私を見下ろしている――否、塔は私なんか見てはいないだろう。時計の文字盤は凛と前を向いて、空中都市と呼ばれるこの町の中心を見据えている。

沈む太陽の光が文字盤に反射して、私の目を眩ませた。時計塔から目を背けて、二十階に降りるため、広場のエレベータのボタンを押した。今、エレベータは三十二階にいるが、下へ降りてきているようだ。直に到着するだろう。私がエレベータを待っていると、後ろに学生らしき三人組が並んだ。彼女たちは噂好きだ。時には新聞や号外よりも早く情報を手に入れて、仲間内で囁きあう。このときも、彼女たちは何か話題を仕入れていた。

「ねえ、聞いた？」

三人のうちのひとりが、おもむろに話を切り出した。使い古されたテンプレート、噂話の始まりを教えてくれるものだ。なんのこと、ともうひとりが返す。

「上にさ、亡霊が上がってきてるらしいんだよね。A区で見たって人がいるんだってさ」

話を切り出した学生が、深刻そうな声音で言った。すると、他のふたりの間にどっと笑いが起こる。うそ、と彼女たちはケラケラ笑った。私も、デマだろう、と思った。と同時に、さっき連絡路で聞いた少年の歌が脳裏に蘇った。

「ミトってば、またウソ言って」

「ウソじゃないよ、ホントの話。これは信頼できるよ」

ミトと呼ばれた学生が、ホントだって、と繰り返す。が、他のふたりはあまり信じていないようだった。

「というか、上に来る前に門番に見つかっちゃうじゃない。どうやって亡霊が上まで来るのよ」

ふたりの片方が、ミトに問う。

「それは知らないけど、でもなんとかなるんじゃない？　見えないように忍び込むとか」

ミトが答えると、ふたりはアハハと笑う。門番に見つからないように上がってくるなんて、不可能に近い。私

もそれには同意見だった。
学生たちの話題がB区に新しくできたカフェに移ったころ、エレベータの扉が開く。あっ、と学生が声を上げたが、先に乗り込んだ私に続いて乗りはしなかった。彼女たちは上へ行くのかもしれない。
エレベータはすぐに二十階に到着する。開いた扉を素早くくぐり、さらに下へ降りていくエレベータを見送った。
D区はほぼ住宅街だ。中心部となる二十一階は飲食店なども幾つかあって、それなりに人の往来が激しいのだが、ひとつでも階層が変われば途端に静かになる。だいたい賑わいが途切れないのは、A区とB区といった店の集まる場所だろう。
私の家はD区の端のほうに建っているアパルトメントで、古いからか中心から離れているからか、住人が私含め四人しかいない。私は、アパルトメントのひびの入った壁を見上げた。ここに帰ってくるのもお決まりになってしまった。
自分の部屋に入って、ベッドに倒れ込んだ。疲れきった身体から力が抜けて、意識が朦朧としていく。そのまま、私は眠りに落ちた。

次の日、私はまた、あの連絡路を歩いていた。A区に着いたとき、何やら騒ぎが起こっていることに気づく。何があったのだろう。私の中の野次馬根性のようなものが首をもたげてきて、私はそれに従って騒ぎの方向へ歩を進めた。人だかりが見えてくるにつれて、壁を作っている人々の声が耳に届く。
「盗みだってよ」
「うわー派手のやられたなあ」
「警備員は何やってたの？」

人だかりの後ろから背伸びをして見ると、昨日の帰りに私を引き止めたアクセサリー屋だった。チラリと見えただけでも、ガラスが割られ、店内が荒らされているのが分かる。相当ひどい被害が出たようだ。
私が店のほうに気を取られていると、横から誰かにぶつかられ、体勢を崩しそうになってしまう。ぶつかった人のほうに目をやると、フードを目深に被った背の低い人間が走っていくのが見えた。私はそれを追いかける。
人間は軽やかな足取りでどんどんC区のほうへ走っていくが、私を引き離していくかと思いきやスピードを緩めたり、まるで私をどこかに誘導しているようだ。そして、私の息が上がり始めたころ、人気の少ないアンティーク店の裏で止まった。
人間は人がいないことを確認するように辺りを見回すと、私を振り返った。
「……ッ！」
振り返った人間と目が合った瞬間、私は息を飲んだ。
「あなた、どうしてここに」
いるの、と言いかけて、それは彼の差し出した手で遮られる。彼の手には、私の財布が握られているが、そんなことは今どうでもいい。彼は――あのとき下の世界で歌っていた少年は――どうしてここにいる。
「いま説明してる暇はない。財布を取ったことは謝る」
少年はそう言って、私に財布を押し付けた。それを受け取った私は、どうして、ともう一度聞いた。少年は私の質問には答えずに、再度周囲を見回す。
「人ならしばらく来ないと思うわよ。この辺りは開店が遅いもの」
「本当？」
私は頷(うなず)いた。少年は詰めていた息をふーっと吐き出すと、私のほうへ向き直った。改めて正面から彼を見た。黒い髪、白い肌。間違いなくあの亡霊の少年だ。だが、ほかの亡霊と違う箇所がひとつだけあった――目だ。ほ

かの亡霊は白く濁った瞳をしているか、黒曜石のような黒い瞳を持っているものだ。しかいし彼の瞳は、ルビーのような紅。

少年は真剣な顔で、口を開いた。

「おれを助けてくれないか」

◆あとがき

最初に、「櫻（さくら）２０１８年春号」を手に取って読んでくださり、ありがとうございます。内容はいかがでしたでしょうか。

私の書いた小説は、全部とても春とは思えないような内容ばかりですみません、楽しく書かせていただきました。病んではいません。以下解説のようなものです。良ければ見ていって、フーンと思ってください。

『オレンジのアトリエ』……これは随分前に書いていたものに、加筆修正したものです。孤独な画家と彼が愛した人の話です。

『カース』……カースというのは、英語で呪いを意味する言葉です。〝やつ〟を殺してしまったから俺も死ぬ、みたいな話です。

『ジ　エンド』……完全な三人称視点、ナレーターがいるかのような地の文が書きたかったのですが、難しかったです。この話は続きがありますが書くかどうかは微妙なところ。

『パイロキネシス』……パイロキネシスとは、発火能力のことです。炎を起こす彼女が人類を滅亡させる話。

『「鮮烈なモノクローム』……亡霊の少年と人間の「私」の話。すごく続きがあるよってところで終わってますが、このあとのことも考えてあるので、そのうち何処（どこ）かでカタチに出来たらと思っています。

ここまで読んでくださってありがとうございます。またお会いしましょう。

●●の村

澪音

……体が勝手に目を覚ます。
あたりをざっと見回しても俺以外には誰も寝ていない、窓から見える日も高くのぼっていた。
時間を確認する、午前１１時前…そりゃ誰も寝ていないわけだ、とりあえず部屋を出た、廊下に出て階段を降りようとすると俺の視線の先に俺と同い年の少年、守風(かみかぜ)守風(かみかぜ)が腹をおさえてうずくまっている
「よう、こんなところで何してんだ？」
俺がそいつの肩を軽くたたいて呼びかける
「…あぁ、誰かと思ったらわが友じゃないか…ぐっ、おまえがこうして俺と話すのもあらかじめ決められた運命(さだめ)だったのかもしれん……うっ」
時折苦しそうな表情を見せながらも守風は守風なりにあいさつをしてくれた、……でもいまのこいつが『こうなってる』ってことはかなりやばい
「なぁ、守風、大丈夫か？」
俺は守風の様子をうかがう
「……大丈夫だ、……ただ俺の中の邪竜が暴走してるだけだ！これくらい……」
「おまえ、腹痛いだけだろ、早くトイレいけよ。」
俺が真顔で言うと守風はすばやくトイレへと駆け込んだ。
あくびをしながら階段を下り一階に出た、時間も時間だったからか居間には誰もいない、洗面所で顔を洗う、

遅めの朝飯を食べるために食堂(とは言っても普通のキッチンと変わらないのだが)に入ると長い髪の少女、天草がテーブルに頭をのせて眠っている

「おーい、天草ー、寝るんなら上行って寝ろよー」

「……う……ん、あと5年……」

ゆすって起こそうとしたが天草は訳のわからない寝言を言い出したのでこれは起きないな、と思いながら朝飯の準備を始めた、コンロの上に置かれた鍋の中に入った味噌汁を温めなおし、茶碗にごはんをつぎ、漬物が入ったタッパーを冷蔵庫から取り出しそれらすべてをテーブルの上に置く、隣で眠っている天草をよそに椅子に座って一人食事を始めた。

静かな部屋に漬物を噛むポリポリとした音が響く、やっぱり食事というのは誰かと一緒に食べるからこそ楽しいのだと実感する。

朝飯を食べ終わり食器を重ねて水につけておく、食堂を後にして寝間着から着替えるために再び二階へと上がる、部屋で着替えを済ませて出たその時トイレから水の流れる音がした、トイレからはやはり守風がお腹をさすりながら出てきた、守風は俺を見つけると近くまで寄ってきた。

「もう腹は大丈夫か？」

俺の問いかけに守風はすがすがしくうなずいた

「何とかなったよ、……さっきはごめんね。また僕のせいで迷惑かけたな……」

そういうと守風は少し申し訳なさそうな顔をする。

「別に守風は悪くない、それに俺は迷惑じゃなかったぜ！だから気にするな！！」

そう、守風は悪くない、……守風は二重人格なんだ、疲れやイライラがたまると人が変わりあんな風に中二病をこじらせてしまうのだ。

俺は守風にそういうと守風も元気を取り戻し一階へと下りて行った。
改めて誰もいない居間に出ると地下から人の叫び声と何かが崩れ落ちる音がした、
「な、なにごとだ！？」
俺はあわてて地下に降りる、日の光がはいらず湿っぽい地下室の電気をつけると俺の目の前まで本の雪崩が押し寄せていた。
「……なんなんだよ……これ……」
その時、俺の独り言に答えるかのように雪崩の下から少女、明里が這い出てきた
「危なかった…今度こそ本につぶされるところだった…」
明里は独り言を言い終わると上を見上げ、最初からここにいたのがわかっていたかのように俺を見て本の片づけを手伝ってくれと頼んできた
……なんで俺が手伝いを、とんだとばっちりだと思いながらもしぶしぶ手伝うことにした
本を一冊ずつ拾い上げて棚に戻していく
「にしても、電気もつけないでなにしてたんだよ……」
「何って、研究に決まってるじゃん！！」
明里が当たり前のようにそう言うと俺はあきれて深いため息をついた
よくわからないが、明里は毎日地下室にこもって『研究』をする。彼女いわく呪術に関する研究らしい、俺にはよくわからないが……。
「……せめて電気だけでもつけろよ」
俺がそうつぶやいても研究熱心な明里の耳には入ってなかった
１５分もすれば本の雪崩は消え、いつも通りの本棚だらけの地下室にもどった。

「ありがとう！やっぱり人数が多い方が一人でやるよりも早く終わるね！！」
そう言って明里は満面の笑顔でお礼を言ってくれた。……今の言葉からすると本の雪崩が起きたのは今日が初めてじゃないようだな……。
「まぁ、気をつけろよ」
俺はそれだけを言うと地下室を後にした、階段を上がっている途中で明里が謎の呪文をぶつぶつと唱えていたのがかすかに聞こえた。
外から１２時を告げる教会の鐘が鳴った時には俺は外に出て弓の練習に励んでいた。
俺は気付いた頃には弓を持っていた、なんで弓なのかは俺にもわからない、ただ俺だけじゃなくここにいるみんなが剣や銃と言った武器を持っているのだ。
……それに、俺たちが今もこうして武器を持っているのには理由がある、まぁそれは今言うべきことじゃないけどな
今実際に俺が弓の練習をしている後ろで一人の少女、村雨が刀を構えて素振りをしていた。
素振りといってもまるでそこに見えない敵でもいるんじゃないかと思うような身構えと刀の振り方、とても一言で素振りとは言えないものだった。
村雨はこうして素振りをしているときは基本無口だから今は彼女の素振りを声に出してほめることはできない、だから俺は心の中で村雨の素振りを絶賛すると同時に負けていられないという感情が芽生える。
俺は深呼吸をして改めて目の前の的を見る、矢を構え素早く手を放す、ヒュっと音を立てて矢は的の真ん中に突き刺さった。
「……よしっ！」
村雨に聞こえないように静かにガッツポーズをとると緊張の緩みからか俺の腹の中の虫が鳴った。

「……如月のところに行ってお昼をもらってきたら？」
腹の虫は村雨の耳にも届いたらしく、それだけを言うと再び素振りを再開した。
……確かに腹が減った、俺は村雨の言う通りに如月のいる教会へと行くことにした
教会はこの村の中で最も大きい建物だ、教会の重たいドアを開けると一番奥で修道服を着て一人静かに祈りを捧げている少女、如月がいる。
「……あっ！来てたんだ、お昼なら隣の部屋にあるから葉月に言って」
如月は俺にそういうとまた祈りを捧げ始めた、邪魔をしてはいけないと思い
俺は隣の部屋へなるべく音を立てずに行った。
隣りの部屋にはコンロや冷蔵庫などの簡易的なキッチンになっていて、俺たちはいつも好きな時間にこの教会で昼飯を食べている。
その部屋では如月の双子の兄、葉月が無言で鍋をかき回していた。
「よぅ、葉月！！昼飯を食いに来たぜ！」
俺が後ろから手を振って名前を呼ぶと葉月は「待ってたぜ！」と言ってテーブルの上に温かいカレーを置いた、
俺は椅子に座るとすぐさまカレーを口に運ぶ、葉月はだれよりも料理が上手い、
「やっぱり葉月の作る料理はいつもうまいな！！」
毎日のようにこう言うと葉月は決まって「ありがとう」と笑顔で言ってくれるのだ。
俺がカレーを食べ終わると葉月は食器洗いを始めた、こういう時は俺も手伝うべきなのだろうが俺は以前ここで　食器洗いを手伝った時に皿を割ったことがあるのでそれ以来葉月も手伝わなくていいと言ってくれた。
洗い物が終わると葉月は椅子に座って本を読み始めた、葉月は普段からおとなしく、いつも如月と一緒に一日中教会にいて誰か来れば昼飯を出してくれるのだ。本を読むのは葉月の日課らしく一度読むとしばらくは返事に

答えてくれない、如月(きさらぎ)も祈りを捧(ささ)げる以外に何もしないので俺は葉月にごちそうさま、とだけ伝えると教会を後にした。

……昼飯を食べて日もだいぶ高くなってきた昼下がり、周りに誰もいない誰もいない空の下することもないのでさっきと変わらず弓の練習をしていた。俺はかなり筋がいいらしく放つ矢はすべて的の真ん中に突き刺さっている。

「きっと俺が弓を持つようになったのは弓の才能があったからに違いない！」

俺がそんな独り言を言ってると

「本当にそうかもしれないな！！」

はきはきした声と同時に後ろから誰かに肩をがしっとつかまれた、俺はうわっと少し声を出して驚き後ろを振り返る、俺の方をつかんでいたのは青年、長月だった。

「なぁ、暇なら俺と手合わせしねえか！？」

長月は俺を見るとにこにこしながら決まってこう言う、長月は体術が得意で暇さえあれば誰にでも手合せを申し出てくるのだ。

「いやだよ！！大体俺は長月みたいに体術とかできねぇから！手合わせなら天草とかの方ができるだろ……。」

長月の誘いを断ると長月は俺の肩さらにがしっとつかんだ

「弓の才能があるなら大丈夫だ！！きっと体術の才能もある！おまえならできる！！」

親指を立てて長月はぐっとポーズをとる。

……長月はポジティブすぎる、ポジティブを通り越して暑苦しい……。

「今日は本当にそういう気分じゃないんだ！！」

俺がそう言うと長月はパッと俺の肩から手を放した。

「そうか、本調子じゃないときに手合せしてもそれは本当の手合せじゃないからな」
長月が個人的に解釈をすると新しい人を探しにどこかに行ってしまった。
誰もいなくなると俺はその場に寝転んだ、空は果てしなく遠く、寝転んでいる芝生も吹いてくる風も心地よい、俺は目をゆっくり閉じ、気が付くと俺は言葉を発していた
「……こうして暇なときはよく狩りに行ってたなー」
……まてよ、俺は狩りなんてしたことないのに、今のだとまるで俺が何度か狩りをしたことがあるみたいな言い方じゃねぇか、じゃあ俺は一体どこで狩りをしたんだ？…あれ、待てよ、そもそも俺はなんでここにいるんだ？俺は何者なんだ？……俺は、俺自身がわからない……。
「……っ！！」
気が付くと俺はいつの間にか眠っていたらしく目を開けるとメガネをかけた少女、文月が無表情で俺の頬を指でぷにぷにと突いていた。
文月にぷにぷにされ続けるわけにはいかず、俺は体を起こす。
空はさっきまでと違ってオレンジに染まっており、心地よかった風も肌寒いくらいにまだ変わっていた。
「日が暮れたから俺を起こしてくれたのか？文月」
俺が話かけても文月は何も答えない、それもそのはずだ、俺たちは文月の声を一度も聞いたことがない
「……。」
文月は何も言わない代わりに腕をスッとあげると海側を指差した。
……どうやら俺を起こした理由は『これ』だったらしい、そこにいたのは黒く、うねうねと動く謎の生命体がこちら側へとゆっくり歩み寄ってきている光景だった。
この謎の生命体こそが俺たちが武器を持つ理由、どうして俺たちがこんなやつと戦っているのか、それを語る

には少し時を遡る必要がある。

・　　・　　・

俺たち９人は親の顔も名前も知らない孤児だった。

教会がたてた小さな孤児院で大勢の子供たちと一緒に毎日をただなんとなく過ごしていた。

俺たちが出会ったときのことはあまり覚えていない、ただ俺たちは子供からも大人からも多少避けられており避けられていた者同士気付いたら仲良くなっていた。

友達もたくさんでき孤児院の中でもだいぶ人目を気にしなくなってきたある日のこと、俺たちは孤児院の中で一番偉いシスターに呼ばれた。シスターはただついてきてとだけ言うと俺たちを連れて孤児院を出た、孤児院を出たことなかった俺たちは速足のシスターの後を追いかけるのに必死だったが初めて見る外の景色に感動を覚えていた。

やがてたどりついたのは一軒の家、シスターはここで立ち止まると俺たちを見てこう言った

「あなたたちはこれからここで暮らしなさい。」

それだけを言うとシスターは振り返ることなく帰ってしまった。

その日から俺たちは９人で仲良く暮らし始めた、しかし不思議なことにこの村には住民が一人もいなかったあるのは十数件の空き家と大きな教会。そして村の立て看板にはこう書いてあった

『●●の村』

文字が黒いペンキのようなもので塗りつぶされておりここが何の村なのかはいまだにわからないままだ。唯一いたのは影のように黒い謎の生命体、そいつらはある日突然現れて俺たちを襲ってきた、こうして俺たちは気が付けば武器を取り、敵を倒しながら日々の生活を送るようになった。

・　　・　　・

俺が弓をかまえる頃には全員が集合していた。

「……にしても今日は数が多くないか？」

葉月が遠目で敵を確認している

「ま、どちらにしても倒すまでだ！！」

長月はそう言うと右手でつくった拳を左の手のひらに叩(たた)きつけた

敵はうねうねとした自分の身体から黒い何かを出した、身体から飛び出た何かは俺たちめがけて落ちてきた、俺たちが黒い何かをよけると地面にべしゃっと音を立てて着地した、黒い何かは液体になったかと思うともぞもぞと動きだしあっという間に人型になった、一体が人型になっているうちに黒い何かは三つ四つと飛んできて人型になり俺たちを包囲した。

「なんなのこれ……」

如月(きさらぎ)が気味悪そうに言う

「……とにかく倒すしかないだろ！」

俺がそう言ったのを合図にみんなが武器を構えなおし攻撃を始めた、剣、銃、弓、さらには拳や魔術の攻撃までか飛び交った。

俺も弓で敵を一体づつ倒していく、親玉と思われる大きな敵は休むことなくこちら側に敵を送り付けてくる。

……このままだときりがない！！

そう思った俺は弓を敵と敵とのかすかな隙間から親玉めがけて放った、放った弓矢は親玉に命中すると俺たちにまとわりついてた敵が消滅した、消滅したのは親玉も同じだった

フッと風で飛ばされた埃(ほこり)のように黒い影が左右に吹き飛ぶと親玉の中から現れたのは俺たちよりも少し年上に見える一人の青年だった。
「なーんだ、もう見つかったのか、つまんないなー」
その人はそう言って口を少しニヤリとさせると辺りをきょろきょろと見回し始めた。
「あ、あなた！！つまらないとはなんですか！！」
守風が口を開くとその人はゆっくりと守風に近づき守風の前で手をかざしたかと思おうとその手からさっきと同じ黒い何かが発射され、もろに攻撃を受けた守風は後ろに倒れた。
「守風っ！！」
俺の叫び声に守風は答えるように体をゆっくりと起こし始めた、どうやら大した怪我(けが)ではなさそうだ。
しかし、俺の叫び声に反応したのは守風だけじゃなかった。
その人は視線を守風から俺に移した、俺とばっちり目が合うと次の瞬間には俺の目の前にまで来ていた
「……見つけたよ。こんなところにいたなんてね」
俺の目の前に立つとその人は少しにやついた顔でそう言った
この人は何を言ってるんだ！
俺がそう思ったのがわかったのか顔を変えることなく口を開いた
「僕だよ、わからないのかい？」
「は？どちら様ですか！？」
俺の率直な感想にその人は少し動揺したような顔をした
「……ちっ、覚えてなかったか…ま、無理もないよね。……ちょっと手荒だけど仕方ない！」
その人はそう言うとまたさっき動揺俺の前で手をかざした

「……っ！！」
その瞬間、激しい頭痛が俺を襲い、俺はひざをついた
「大丈夫か！？」
村雨の声に正気を取り戻し、俺は顔を上げる
「大丈夫だ、これくらい……！！」
そう言いながら顔を上げ、目の前に立っている青年を見ると気付けば俺は口を開いていた
「……兄さん」
俺がそう言うと、兄さんは満面の笑顔を浮かべた
「思い出してくれたようだね！神無（かんな）！！」
神無…俺の名前…頭痛の後、俺はすべてを思い出した……孤児院で暮らす前、小さな村に兄さんと二人で住んでいたこと、兄さんとよく狩りに出かけていたこと、そしてその村が襲撃に遭ってなくなってしまったことも…
気付けば俺は涙を流していた
「あ、あれ？俺、なんで泣いてんだろ……」
みんなも俺の涙に気付いたのか近づこうとすると黒い影が行く手を阻んだ。
「君たちには少し大人しくしてもらいたいね」
もちろん影を放ったのは兄さんだ
「兄さん！！なんで！？みんな俺の友達なのに！」
兄さんは俺を見るとまたニヤリと笑った
「神無はわかってないな……いや、ここにいる誰一人だってわかってない！！」
そう言うと兄さんは手を動かし、みんなの行く手を阻んでいた影を消した

「……少し余談をしようか、……君たちはどうして今ここにいると思う？どうしてこんな人ひとりいない村にいると思う？」
兄さんの問いかけにみんなが答える間もないまま兄さんは口を開いた
「答えは簡単だよ、ここがあらゆる邪神、邪竜、悪魔、…『幻影』と呼ばれるこの世の中のすべての影が集まる『幻影の村』なのさ！！つまり、君たちは人間じゃない！何かしらの邪神や邪竜の血を引いているのさ！！」
兄さんは両手を広げ、自慢げに言った
「…それがなんだって言うの！？」
天草が少しむっとして言う
「そうよ！たとえ邪神の血を引いていたとしても私たちはほかの人間と変わりなく生活した来たわ！！」
如月（きさらぎ）も続けて声を上げる
「……君たちは本当に何もわかってないな、この村に住むには条件があるのに」
兄さんがそうぼそっとつぶやいたのが俺には聞こえた
「条件って…何？」
俺が思わず聞くと兄さんは不吉な笑顔を浮かべた。
「ここに住む条件なんて簡単さ、……一度でも『幻影』の力を使って人間を殺したことがあるものだけがこの村に住むことができるのさ！」
兄さんの言葉を聴いて場が一瞬で凍りついたのがわかった
「……は？」
「それってつまり……」
「……嘘（うそ）でしょ……」

兄さんは笑顔を消すことなく言い続けた
「嘘(うそ)じゃないよ、君たちは自分でも気づかないうちに力を使って自分の親、友達、赤の他人…いずれかを殺していることに変わりはないよ…神無だってそうさ！君はある日突然力が暴走したんだ、暴走した結果僕たちの住んでいた村が壊滅した…ここにいるみんなが人殺しで世の中から避けられてきた存在なんだ！」
『人殺し』、その言葉が重しになって心に負荷を与えてくる、それぞれが動揺を隠せていない、当然俺もだ……。
「いやだ…こんな真実受け入れたくない……俺は……信じたくない……」
涙はあふれるばかりで止まることを知らない、その時、俺には見えていなかった、絶望の淵(ふち)に立った俺に兄さんが影を放っていたことを
「……っ！」
気付けば目の前まで襲ってきていた影に対応できず目をつむった、しかし影の攻撃は来ない、俺はつむっていた目を恐る恐る開けた、目の前にいたのは武器を構えたみんなだった。
「ちっ！もう少しだったのに…邪魔をするな！！」
兄さんは再び影を放った
その影を天草の双剣が切り刻んだ
「しっかりして！！」
天草が俺を見て言う
さらに襲いかかってくる影を長月がこぶしで粉砕して言った
「…確かに、こんなこと認めたくねぇけど……認めるしかねぇんだ！！」
村雨の刀が影を一刀両断して言った

『認めない』って言って逃げることは簡単だけど、ここで立ち向かうことこそが今の私たちには必要なんじゃない？」
背後から迫ってくる影を守風の銃が打ち抜いて言った
「おまえの力はそんなものか！わが友よ！おまえ自身の運命(さだめ)運命(さだめ)に抗(あらが)うんだ！！」
いつの間にか守風の人格が変わっている、おそらくさっき攻撃を受けたせいだろう……。
葉月の薙刀(なぎなた)が影を真っ二つにして言った
「こんなところで落ち込むなんてらしくないよ！」
明里が呪術で影を炎で燃やしながら言った
「大丈夫だよ！！私たちもついてるんだから！」
文月(ふづき)の魔法で影が雷に打たれた
「……。」
文月(ふづき)はファイトっと言わんばかりにガッツポーズを見せた
如月(きさらぎ)が十字架を手に持ち祈りを始めると俺の周りが光に包まれた、影が光にあたると一瞬で消えてしまった
「確かにわたしたちは邪神の血を引いてるかもしれないけど、それでもわたしたちには神様の加護があるわ！」
如月(きさらぎ)が言った
「くそっ！！さっきから邪魔ばっかしやがって！！もう少しで神無を……。」
兄さんが怒りを爆発しさっきの倍の数の影を放とうとしている。
みんなが影の多さに少し一歩二歩と退け始めた
……今度は俺がみんなを救う番だ！！
そう思ったと同時に俺は矢を放った、矢はまっすぐに飛んでいき兄さんの体を貫いた。

「……っ！！なぜ…なぜだ神無っ！」
兄さんの体からは血があふれ出し吐血までしていた
「兄さん、すまない、兄さんを救うにはこれしかなかったんだ…」
俺は兄さんの目をなるべく見ずに言った。
「ふっ……これが神無の選んだ道か」
兄さんは死が近いのかさっきまでとは違った穏やかな声で言った
「……兄さん、俺の名前神無じゃないよ、……『神在』って言うんだ！」
兄さんの体が光に包まれていく
「そうか、『神在』か、いい名前だな……」
最後にそう言うと兄さんはスッと消えていった。
戦いがあっけなく終わった今、俺は誰もいない場所をただぼおっと見ていた
「……本当にこれでよかったのかな……」
ふと思ったことが口に出た
「大丈夫だ！！神在が自分自身で決めたことだ！なにも間違っちゃいねぇよ！」
長月が俺の肩に腕を組んで言った
「自分で選んだ道に間違いなんてないんじゃない？」
村雨が微笑(ほほえ)んで言った
「そうだよ！ってことでこれからもよろしくね！」
天草がにこにこと笑う、文月(ふづき)もうなずく
「また本に埋もれたらたすけてね！」

明里が背中をポンッと叩(たた)いた
「僕も！…またあんな風になったらお願いするよ…」
守風もいつの間にか人格が戻っていた
「これから先も神様は神在のこと見てるから安心して！」
如月(きさらぎ)が言った
「……にしても腹減ったな、晩飯にするか！！」
葉月が笑顔で言った。みんな賛成といわんばかりに駆け足で教会に向かう、俺はふと空を見上げた。
……俺はきっとこの先もこんな日常を続けるんだ！
普通の生活をしながら村に現れる敵を倒すという俺にとってはなんてことのない日常を。

◆あとがき
ここまで読んでくださりありがとうございました。
今回書いてみて思ったこと、「長(おさ)いっ！！」
前回もそうだったのですが書いていて本当に長いなーって思います。
今回はかなり裏設定とか考えていたんですが全く使われていませんね！そこら辺の設定なんかは次回関連作品として書きたいですね！（こういうのは大体が実現しないような気がしますが…）
あと9人を動かすのが意外と大変でした、セリフに偏りがかなりあると思いますがあまり気にしないでもらえると幸いです。
ではでは今回は特に解説もなく終わりにしたいと思います。
本当にありがとうございました！！！

スミレ

蒼

「何を描いてるの？」
僕はその声に顔を上げる。すると、どことなく幼い顔立ちの女の子がいた。
「すみれの絵だよ」
僕は彼女に描きかけの絵を見せた。
「わぁ、綺麗！私、すみれが好きなの！」
彼女は頬をほころばせ、うっとりとした表情で絵を眺めた。
「でも、なんですみれ？ここには他のお花も沢山咲いているのに」
彼女の言う通りここには他の花も沢山咲いていた。
「僕の好きだった子がすみれの花が好きだったから」
そう言うと、彼女はにやっと笑い僕を肘で小突いてきた。
「でも…、その子は交通事故で亡くなったんだけどね……」
僕がぽつりと言葉を零すと、彼女は小突くのを止め悲しそうに僕を見つめた。ころころ表情が変わるなと思い僕は彼女を見つめると、どこかで会ったような気がした。
そのことを聞こうと口を開きかけると、家族の呼ぶ声が聞こえた。
「……、ごめん、僕もう行かなきゃ」
立ち上がり、声がする方向に足を向けると、服の裾を掴まれた。振り返ると、彼女が

「ねぇ、また会える？」
と、悲しそうな目で言ってきた。
だから、「うん…、また、いつか会えるよ」ついそう言ってしまったんだ。
彼女は嬉(うれ)しそうに微笑(ほほえ)み、僕を家族の元まで連れて行ってくれた。
そこで僕は目を覚ました。

花うらない

「好き、嫌い、好き、嫌い……」
そう呟きながら、花弁をつまんでは取る、つまんでは取るを繰り返す。
大体は「嫌い」で終わってしまう。そのせいなのか、私の恋は実った試しがない。
「好き……、嫌い……、好き……、あっ……」残りの花弁は残り一枚。つまり……。
「……、嫌い……」
最後の一枚をつまみ、そう呟きながら取った。もう花に花弁は残っていない。
「はぁ……」
ため息をつきながら、花弁の無くなった花を放り出し、後ろに倒れる。
「また、この恋も叶わないのか…」
私は寝返りを打ち、横に私と同じように転んでいる花占いの相手の頬を撫でた。
「でも……、もう手に入れちゃった……」
そう言って私は彼に抱きついた。
「ふふ……、ずっと一緒に居ようね……」
ぎゅっと抱きしめた彼の体は、少し冷たかった。

蒼

◆あとがき

初めまして。蒼(あお)と書いて「そう」と読みます。

読んでいただきありがとうございます。

今回のお話は、少し考えるお話だったと思います。

まず一つ目の「花占い」ですが、これは少し簡単だったと思います。

あらすじとしては、女の子がタイトルにもしている「花占い」をするお話だったと思うのですが、幾つか不可解な点があったと思います。

まず、一つ目に、「また、この恋も叶(かな)わないのか…」と言っているのに、次のセリフでは「でも…、もう手に入れちゃった…」と言っていることが矛盾していると思います。

そして二つ目に、抱きしめた彼の体は、少し冷たかった。と、表現しています。

この二つのことから、彼はもう亡くなっている、ということがわかると思います。

何故(なぜ)、男の子が亡くなっているかと言うと、女の子は好(よ)きな男の子が出来る度に花占いで占うのですが、本文にもあるように女の子は大体「嫌い」で終わってしまいます。

このような結果がいくつも続き次第に女の子の心は病んでいってしまいます。

そして、本文のような結果になってしまいました。

次に二つ目の「スミレ」ですが、こちらは「花占い」よりかなり難しかったと思います。

あらすじを書くのもとても難しいのですが、簡単にまとめると、男の子と女の子が話しをして、男の子が家族のもとへ戻る、そんなお話だったと思います。

このお話には色々と不思議な場面があったと思います。

一つ目に男の子と女の子がどこにいるかですが、実は生と死の狭間(はざま)にいます。

根拠は四つあります。
まず一つ目に、男の子と女の子が初めて会ったとき、「どことなく幼い顔立ちの女の子が居た」とあります。この時点ではまだわからないと思いますが、後々大事なヒントとなってきます。
二つ目に、男の子が女の子に描いたすみれの絵を見せた時に「私、すみれが好きなの！」と言っているのと、「僕の好きな女の子がすみれの花が好きだったから」「でも…、その子は交通事故で亡くなったんだけどね……」と男の子が言っている事から、女の子が男の子が好きだった子じゃないかという臆測が立てられます。
そして三つ目に、これが決定打となるのですが、「僕は彼女を見つめると、どこかで会ったような気がした。」と、本文で書いています。
このことと、最初に書いた「どことなく幼い顔立ちの女の子が居た」ということを踏まえ、女の子は紛れもなく男の子が好きだった子というのがわかります。
そして最後の四つ目は、「家族の呼ぶ声が聞こえた」というところです。
何故ここかというと、その後に「僕を家族の元まで連れて行ってくれた」と書かれた後に、「僕は目を覚ました」とあるからです。
どういう事かというと、男の子は何らかの事故に遇い、昏睡状態の時に行ったのが、女の子と出会った、あの場所でした。
女の子と話している間に、男の子の治療が完了したことで、家族の声が届き、無事男の子が帰って来ることができたのです。
これで、あとがきを終わろうと思います。
こんな長々したあとがきを読んでいただき、ありがとうございます。
また、櫻で会いましょう。

時を結ぶ桜

Right

「どっかで会ったことあったけ。」
今日はずっと授業に集中できなかった。といっても普段もあまり授業を聞いていないのだけど。
「おーい。」
「うわっ！！」
気が付くまた隣に連がいた。
「また一人の世界に入ってる。しっかりしろよー。」
「うーん、あのさ北野さんってどこかで会ったことあったけ？」
「いや、ないよ。俺の知る限りだは。薫はあるの？」
「いや、たぶん、ないかな？俺に聞くなよ。でもなんか冷たいよな、雰囲気が。」
確かにそう思うけど…。
「北野さんって向こうでは神子（みこ）やってたんだね。」
ふと、クラスの女子の声が耳に入ってきた。
「じゃあ神社とかに住んでたの？」
「ええ、天流神社を祖父母が営んでいて前までそこに住んでたの。」
天流？やっぱりどこかで聞いたことある。あぁ、思い出せない。

言うまでもなくやはりその後の授業も身が入らなかった。

帰りは連が補習を受けていたため一人の帰りだった。

「鈴峰くん」

驚いて振り返ると北野さんが立っていた。

「あ、ごめんなさい驚かせて。一緒に帰ってもいい？」

「あ、うん。」

話すことが浮かばずしばらくの間沈黙が続いた。あー、少しでも話せるような話題の一つや二つないかなぁ。

僕はどうにかして沈黙破ろうと声をかけた。

「学校にはもう慣れた？」

「うん。ねぇ、ノートを買うのついてきてもらってもいい？」

「いいよ」

学校の近くには大きなショッピングモールがあるので立ち寄ると平日とはいえ多くの人でこみあっていた。

「じゃあ買ってくるね。」

そう言って彼女は店の中へと入っていった。ふと視線をずらすとベンチで仲睦まじそうに話している恋人と思はれる男女が話していた。だが一方の女性のほうには予知が表れた。病気？だろうか。泣いている男性の傍にはベットの横たわる女性がいた。慌てて視線を外すと北野さんが戻ってきた。

「待たせてごめんね。」

「ううん。じゃ、帰ろう。」

用事をすませた僕らはショッピングモールを後にし、再び人気の少ない住宅街へと入った。

「さっき大丈夫だった？すごく顔色悪そうだったけど。」
「ごめん。大丈夫だよ。」
「隠さなくてもいいよ。少なくとも私の前では。」
「それってどういう。」
予想外の言葉に思わず足をとめた。そうすると彼女は僕に向き直った。
「私はあなたと一緒。あなたと同じものを見てる。」
それはつまり……。
「私も人の死を予知できる。さっきベンチに座っていた女性の予知も見たわ。」
思わぬ展開に息をするのも忘れていて、乾いたのどでようやく言葉を発した。
「じゃあ君も、今までずっと予知を見続けてきたの？」
「うん。だからあなたがその力で傷ついて苦しんでいることもわかる。私だけがあなたを理解できる。」
言い終わると、彼女は「また明日」と声をかけ、どうやら家の前だったらしく家の中へとはいっていった。

彼はいまどう思っているのだろう。カラダの中に流れる血液が冷たくなるような感じがして、気分が悪い。私の言葉をどう受け止めるのか考えるだけで怖い。
その後ベッドに入ってもなかなか寝付けなかった。

次の日なかなか学校に行きたくなくなって家を出るのが遅くなった。門の所には、一番会いたくなかった彼がいた。私は意を決して彼に近づいた。
「ついてきて。」

私はすべてを託す覚悟をした。私がこの力の引き金を引いてしまったであろう出来事を……。

私は人目を避けるために屋上へと行った。ここへ来る途中に授業開始を告げるベルを耳にしたが、今は気にせず目的地へと歩みを進めた。

屋上では風が強くなびいていて、真っ青な空が限りなく続いていた。あの日と同じ青空が……。

「久しぶりだね、薫くん。こうやって二人で会うのは。」

私は振り返って彼に声をかけた。彼は当然驚いたように、ただただ呆然と目を見開いていた。

「あなたと出会ったのはこれが初めてじゃないんだよ。ずっと昔、私は君とあの桜の木の下で出会ったんだよ。だからね、あの日のことをこれから話すよ。まだ幼くて何も知らなかった私が犯したあやまちとともに。あれは確か……。」

『大きい桜の木！！』

いつも訪れる桜の木の下には、私と同じくらいの男の子がいた。

『だあれ？』

私の声に反応した男の子は振り返った。

『ぼく、すずみねかおる！君は？』

『わたしはしおり。よろしく～。この桜は天流桜。ずっと昔からあって、一年中咲いてる不思議な桜なんだよ。』

『へぇ。とってもきれいだね。』

『薫くんはここらへんに住んでるの？』

『ううん、おばあちゃんの家に遊びにきてて明日帰るんだ。』

『そっかぁ。じゃあもう会えないね。そうだ、会えた記念にこの桜で作ったしおり、あげるね。』
わたしはそう言ってしおりを手渡すと男の子は嬉(うれ)しそうにほほ笑んだ。
『ありがとう！じゃ、僕は帰るね。』

あれがいけなかったんだって今更後悔してもしかたないよね。
「君があの時のしおりちゃん……。」
「私もねこっちに来て、あのしおりで気づいたんだよ。」
「そうだったんだ。良かった。また会えて。」
そう言うと彼はまたあの頃と同じようにほほ笑んだ。
「でもごめんなさい。」
「え？どうしてしおりちゃんが謝るの？」
彼は困ったように眉をひそめた。違うんだよ。私が悪いの。だって全ての引き金はわたしが引いちゃったんだから。
「薫君を苦しめたこの力は私のせいなの。」
「どういう意味？」
「私があの時しおりを君に手渡したせいなんだよ。あの桜はあの神社から持ち出してはいけなかったんだ。」
私が話し終わっても薫君は口を開こうとはしなかった。時の流れが永遠のように長く感じるだけだった。
「それを一人で思い悩んできたの？こっちこそ、一人で背負わせてごめんね。」
彼の放った声はかすかに震えていた。どうしてこんなに優しいんだろう。
「なんで薫君が謝るの？悪いのは私なのに。」

「ううん、しおりちゃんだって知らなくって巻き込まれたんだから。君は悪くない。僕は責めたりなんてしないよ。」
「あり、がとう。本当に、ありがとう。」
気が付くと私の目からは次々と涙がこぼれて落ちていた。私はとうとうあふれ出る涙をこらえきれずに泣き出してしまった。
それから私が泣き止むまで薫君はずっと待ってくれた。
「授業サボっちゃったね。」
私はようやく泣き止んで笑えるようになった。それは私が心から笑えた瞬間だったと思う。

ディエーラ・デ・プロミシオン

Right

ここは緑あふれる平和で美しい国アルステリア。争い等はめったに起らず人々の笑顔であふれかえっていた。十年まえまでは。時は十年前をさかのぼる。

「暇だなあ。何か面白そうなことないかなー。なあ、ルイン。」
赤髪でテンパの少年はそうぼやくと木に登って地面を見下ろしていた。
「バカはそうなんで高い所に登りたがるの？何もないのはいいことだしょ。」
地面には水色のショートヘアーの女の子が本を読んでいた。
「なんだよ。その人を子バカにしたような眼(め)は！！そっちがその気なら受けてたとうじゃないかっ」
そう言って少年は木刀を手に取り、跳び下りながらふりおろすもあっさりとよけられてしまった。そして、次の瞬間には
「私の勝ち。カイル、私に一度でも勝ったことあったっけ？」
今度はルインが勝ち誇ったように木に登り、カイルを見下ろした。
「くそ！！つーかお前だって木にのぼってんじゃんっ！」
「私は天才だからいいの！！」
二人はその後も言い争いながら村への帰り道を歩いた。

「あれ？あの子……」
「ん？見かけない奴だな。」
村へと変える途中脇道に見知らぬ男の子が立っていた。カイルやルインとおなじくらいの背丈で黄色い髪のここらでは見かけないような子だった。
「お前ここらへんの奴じゃないよな。道にまよったのか？」
そうカイルが聞くも少年は目をふせたままだった。
「どうして何もしゃべらないんだ？言わないと何もわかんねぇよ。」
だんだんとカイルの口調が荒くなる。一方ルインは少し考え込んだ様子で尋ねた。
「もしかして覚えてないの？」
ルインの一言で少年は頭をあげた。
「え！！マジで何も覚えてないの！？」
ルインがだまれとばかりにニラミをきかすとカイルはだまりこんだ。
「何か一つでも覚えてることある？」
ルインはいつにも増して優しく聞いた。
「アスカ」
「え……」
「僕の、名前」
「なんだぁ、アスカって言うのか！！俺はカイル。カイル・ルシファーンだ。よろしくな！！」
ここぞとばかりにカイルはアスカの前に立ち手を差し出した。
「私はルイン・ディザイア。よろしくね。アスカ」

ルインも負けじと手を差し出した。
「こちらこそ、よろしく。」
たどたどしくもアスカは差し出された手を取った。
「じゃあ帰る場所がわからないんだったら私の家に行きましょう。」
「それがいい、そうしよう！！」
二人のなすがまま三人はようやく村についた。
「ここがコーランだよ。」
「ま、大した名物もないちんけな村だけどなー」
「大したことがないなんてとんでもない！すごく居心地のいい所だね。」
そういったアスカの顔はほころんでいた。
「初めて笑ったな！！」
「え？」
「いや、ずっとなんか苦しそうな顔してたから。良かったなってさ。」
「えーと。そうだったかな？」
「本当、本当！！よかった、笑ってくれて。」
「さ、早く私の家に行こう！！」
村の中を少し進むと周りの家よりひとまわり大きな家が建っていた。
「ここが私の家だよ。いや、私たちの。さ！！入って、入って。」
「え、え、私たちのって？」
ルインがドアを開けると中からお母さんと思われるルインと同じ髪の色の女性が出迎えてくれた。

「おかえり！！カイル、ルイン。その子は新しい友達？いらっしゃい。今お茶をいえるからゆっくりしていってね。」
ルインのお母さんは部屋へと入りお茶を入れ始めた。
「私の部屋は２階にあるの。来て。」
部屋に入るとまず規則正しく整理された本棚が目に入った。
「すごい本の数！！」
アスカは感心半分驚き半分で口をあんぐりあけてつぶやいた。
「でしょう！！ずっとそろえてるんだ。」
アスカの言葉にルインは満面の笑みで答える。
「ところで二人は同じ家に住んでるの？」
「うん。俺の親は昔亡くなって親戚だったルインの家に引き取られたんだ。昔、といってもつい最近のことだけど俺らすっごく仲悪かったんだぜ。なんせ、ルインはこんな風に辛口だからな。」
「それは、カイルがちゃんとしてないからでしょ！！」
「ぶっ！！本当に二人は仲がいいんだね。羨ましいよ。」
アスカはそうつぶやくと目を細めた。
「なに言ってんだよ。アスカはもう俺の親友だろ！」
「そうそう、付き合いの長さは付き合いの深さとは関係ないってね。」
「うん。嬉(うれ)しいよ、ありがとう。」そうこうしているうちにルインのお母さんが紅茶を運んできた。
「お茶が入ったよ。熱いから気を付けてね。ところでそっちの子の名前は？」
「アスカだよ。さっきそこで会ったんだ。」

「アスカだね。二人とも仲良くするんだよ。」
ルインのお母さんはお茶と一緒にお菓子を差し出すと部屋を出ていった。
それから三人がたわいのない会話を交わしているうちに夕方になった。
「ねぇ、アスカ。今日はうちに泊まっていったら？」
「ああ！！それがいい！」
「いいの？」
「もちろん！もし思い出せなかったら一緒に暮らせばいいよ。」
「ありがとう。君たちはぼくにとって大切な親友だよ。」
「ところでさ、ルイン。」
「ん？」
「ペンダントはどうしたんだ？さっきまでつけてたのに。」
「あ！！ない！ペンダントが」
「ペンダント？大切なものなの？」
「うん、形見なの、お父さんの。」
そういったルインの顔はひどく青ざめていた。
「探しに行こう。」
「今から！？」
「ああ、探さなくて後悔するより探して後悔したほうがいいだろ？」
「ありがとう。」
３人はこっそりと家を抜け出して、もと来た道をたどった。

「ないね。」
気が付けば日は沈み、あたりには夜のとばりがおりていた。
「あっ！！あっちのほうで何か光って・・・。」
「アスカ！遠くに行ったら危ないよ！」
アスカを慌てて追いかけた。
「あれ誰？」
アスカともう一人暗闇の中に人影が見えた。
「来ちゃだめだ！」
二人が駆け寄ろうとするとアスカが叫んだ。よく見るとその人影は全身をおおいつくすマントをはおった男だった。
「やっと見つけたよ。アクソナス。探すのにも苦労するんだぜ。」
ルインが飛び出そうとするのをカイルが制止した。
「お前は誰だ？」
押し殺した声だカイルは尋ねた。
「聞いてどうする。まぁ用件はすぐに済むから黙ってそこで見てな。」
男はふざけた口調で言い放つと腰の剣を抜いた。
「アスカ！！！！」
二人は大声で叫びアスカのもとへと走り出した。
「もう遅ぇよ。」
二人が追いつくよりも早く男は剣をアスカへと突き刺した。

「カイル、ルイン……」
か細い声でアスカがつぶやくとアスカの体は光となって消え去った。
「どういうこと……？」
ルインはその場に崩れ落ち、カイルもただただその光景を傍観していた。
「つまり、こういうことだ。あいつは人間じゃないってこと。まぁ、お前らみたいなガキが首突っ込んでいいことじゃねぇんだよ。」
男は剣を収めると森の中へと消えていった。
「なんでアスカは死んじゃったの？」
ルインは涙交じりの声でつぶやいた。すると、ルインの目の前にペンダントが差し出された。
「これ、アスカが立ってたところに落ちてた。」
ルインは差し出されたペンダントを受け取ると大事そうに握りしめた。
「もっと強くなろう。そしたらまた、あいつは……」
気が付けばカイルの目からも涙があふれていた。その日二人は無言でただ歩き続けた。次の日、ルインの前にカイルはいなかった。実は今日カイルの父の旧友のロイ・オルレインの下で剣術の修行をつむことになっていた。
「なんで言ってくれなかったの！？」
怒り半分悲しみ半分でルインは母につめよった。
「カイルがね、その話がきた時にルインには聞かないでほしいって言ってたんだよ。きっとお前に追いつきたかったんだろうね。」
「だからって何で……」

ルインはまたとてつもない喪失感に襲われた。
「なら、私は守ってみせる。次こそ。」

十年後心に秘めた思いを胸に再び物語は幕を開ける。

◆あとがき

最後まで読んでいただきありがとうございまーす。今回の作品はどうでしたか？　ヒントをくれた友達二人には個人的に感謝します。好評だった場合私の気まぐれで続編ができるかも？しれません。新作のほうもよろしくお願いします。ではまた次回お会いしましょう。

◇著作者

山陽女学園高等部

二年生　麻績（部長）

一年生　澪音

蒼（そう）

Right

◇表紙デザイン　麻績

山陽女学園文芸同好会誌　通算二十六号

櫻

二〇一八　春号

平成三〇年三月三〇日　発行

著作者・発行者

山陽女学園高等部

文芸同好会